

【様式1】

令和6年度 授業改善推進プラン

東久留米市立中央中学校 第1学年

教科	学力に関する各調査に基づく生徒の学習状況分析 (数値等で具体的に示す)	具体的な授業改善策及び目標値 (数値等で具体的に示す)
国語	定期考査において「知識・技能」を見取る問題の得点率の平均が48.5%、「思考・表現・判断」を見取る問題は52.3%であった。週1回の漢字小テストは平均60%の得点率であることから、既習漢字の定着に課題がある。文章を書く問題においては、漢字を使用すること、適切な漢字を用いることに課題のある生徒が多い。また、文章を書かせた結果、自分の考えを文章化することに課題がある。	文章を書く活動を通して、漢字を正しく用いる技術と練習する習慣を養うことができるように指導する。「原因と結果」「意見と根拠」「具体と抽象」など説得力のある内容を考え、話したり書いたりする機会を、学期に1回取り入れる。実用的な文章を考えたり、分かりやすく伝えたりする場面を学期に1回取り入れる。
数学	東京ベーシックドリルの正答率が36.4%であり、計算問題に関しては5割程度の生徒が理解している。関数分野である比例や反比例に関しては全体の5%程度しか理解していない。図形分野に関しては、4割程度の生徒が理解している。授業で扱った内容に関する理解力は高く基礎的な内容に関しては7割以上の生徒が理解している。	次年度の東京ベーシックドリルの計算問題の正答率を90%にすることを目標にする。計算問題ができていないとどの分野においても正答率が低下する。1次方程式の単元テストや小テストで理解度の確認を行い、計算力の把握を行う。また、年度末に最終確認と復習を行い、2年生の計算問題の理解力を向上させていく。生徒が自ら解くことができるように授業を工夫し、計算ミスを減らして計算問題の正答率をあげる。
英語	定期考査では、平均点(58点)を超える生徒が、学年全体の50%、80点以上を超える生徒が30%であった。定期考査やパフォーマンステストを実施した結果、小学校の英語活動の時間の成果を受けて、当初から「聞く」「話す」学習に前向きに取り組もうとしている。一方、語彙を着実に増やしていくことが課題である。授業中に英作文に取り組みせると、英語に対して苦手意識をもつ生徒は、最初から「できない」と諦めてしまう傾向にある。	ビンゴを毎時間の帯活動として取り組むことで、単語を書いたり、意味を覚えたりする習慣を身に付けさせる。言語活動は易しいものから段階的に取り入れ、「話すこと」と「書くこと」を関連付けて指導することで、生徒が意欲的に取り組めるようにする。
理科	定期考査では平均点が59点で、学年全体の30%程度が80点を超える結果で基礎知識は定着している。一方で作図など、自ら考えて記入する問題に、課題のある生徒が昨年度と比較して多く、単元「身近な物理現象」における「光の性質」に関連する作図や記述問題の達成率は5割程度であった。	単元の終わりに学習ドリルを用いて演習問題に多く取り組みせ、定期考査や単元テストにおいて8割以上の生徒が5割以上の点数を取れることを目指す。また、実験や体験活動を多く取り入れ、日常生活との関連性を意識させる。